

パリに客死した森有正には、晩年にフランス人の女友達にあてた一連の仏文の書簡がある(二宮正之・編)。その最後の一篇(1969年8月12日)で、かれはあるときパッサハの「パッサカリア」を聴いて得た直観を語る。それはあたかも《本質的な》あるものが「瞬時に音を描びた(調)」として《偶有化》した「恩寵の一瞬」であり、「普段は感覚による欺瞞を一切うけないでいるものが、最もつかの間(fugace)の形で物質化した」姿に、森は《神秘》を感じたと告白する。いうまでもなく、この西欧精神の、より堅固な物質的具現を、森はパリの大聖堂のうちに認め、『遙かなるノートルダム』へと、接近を試みても適わぬ、自分の限界を嘆いてみせた。

その森(1911-76)よりひとまわりを越えて年長の詩人に、金子光晴(1895-1975)がある。その彼がパリに見いだしたのは、腐り行き、崩れ行く退廃の美であり、爛熟のうちに悪臭を放つ文明の奥深さだった。この金子のパリ体験は、一生涯の熟成を経て、ようやく晩年に書き留められた。その『眠れパリ』(1973)に感応したのが、開高健の『夏の闘』(1972)、『ロマネ・コンティ 1935年』(1973)でもあったろうか。「酒、料理、女、機知、明晰さ、寛容さ、個人主義の徹底、知的アナキズムの匂い」といったお決まりのパリの魅力に酔っていた開高は、「ただし、ときどき、どうにも手に負えぬ醜悪さと腐臭が何もとにこみあげてくる」のを、当初は苦々しく感じていたようだ。だがやがて、「膿んだり、分泌したり、醜態したりする」パリという町の疲労と退廃とが、いつ知らず自分の「体のそこかしこに付着した」のを悟る(アンヌ・パイヤ

日本はフランスに何を求め、フランスは日本に何を求めたか。フランスの誘惑・日本の誘惑…交差するまなざし」中央大学文学部50周年記念日仏学シンポジウム(2001年3月28-30日)より

「遙かなるノートルダム」と「群れを嫌うオットセイ」のあいだ、あるいは認識の相互侵食

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学助教授 稲賀繁美

ール=サカイ)。今橋映子の『異都憧憬』(平凡社ラブラリー)と劉建輝の『魔都・上海』(講談社メチエ)を重ね読みすれば分かるように、金子にとってのパリとは、放浪途上の上海、黄浦江を流れる、腐乱する汚物の記憶で透過されていた。それと同様、開高のパリは、従軍作家のヴェトナム体験、「泥沼の戦争」と表裏になって析出された、70年代欧州のネガでもあったはずだ。

森有正のもつフランス精神の高みと、金子光晴から開高健にいたる作家が探り当てた底辺のパリ。その落差と分極の鍵はどこにあるのか。ここで思い出されるのが、ボードレールの言う「現代性」modernitéだ。「現代性、それは移ろいゆくもの、逃げ行くものだ。それは芸術の半面であって、残りの半面は永遠である」と詩人は定義した。これを受け、次の世代の詩人マラルメは、現代性が永遠なるものを追放しようとする趨勢を書き留める。その現代性の符牒こそ、当時詩人が友人の画家エドゥアール・マネの制作に見いだした、日本趣味の洗礼だった。そして世紀末のウィーンの文芸評論家、ヘルマン・バーや文筆家ペーター・アルテンベルクは、その日本美術のなかに、西欧の構築志向を掘り崩し、その弱点を暴露して解体させる「神経の芸術」を見いだすことになるだろう。構築とは無縁の融通自在な「割りつけ」の編集能力とは、また詩人大使ポール・クロデルが、マラルメ詩学を踏まえ、日本芸術の余白の美に見いだした教訓でもあった(渡辺守章)。

認識の主体としての西欧知識人が、『女性』としての日本を、「人形」のよう

に弄びながら、やがてその「人形」によって翻弄され、自らの主体性を蝕まれて抱く、恐怖あるいは退行願望。それはピエール・ロティの『お菊さん』から『秋の日本』への広幅(天久保喬樹)、小泉八雲を経由し、はては文楽の「黒子」に驚嘆し、人形遣いに「身体模倣ではなく、その感覚的な抽象」を見た、ロラン・バルトや、東方・日本に西欧理性の臨界点を験したミシェル・フーコーにまで、連綿と受け継がれる(渡辺諒)。日本を賞味しに来たつもりだったのに、ふと気づくと自らがマダム・ピンカートンと化し、日本人の宴会の肴という嗜好対象に祭り上げられたアンジェラ・カーターの主客転倒劇もある。その裏で、金子光晴やきだみものといった人々は、フランスから「群れを嫌うオットセイ」の反骨精神と徹底した個人主義をも学んだようだ(三浦信孝)。自ら洋行体験はなかったものの、太宰治もこの系譜に位置付けうる、とのディディエ・シージュの指摘は新鮮だった。処女作『晩年』の冒頭に「選ばれてあることの恍惚と不安ふたつわれにあり」と、堀口大学訳でヴェルレーヌの「徴知」を引いた太宰。かれはボードレールのダンディズムを地で行く作家であり、またヴァレリーの「善をなす場合には、いつも詫びながらしなければいけない。善ほど他人を傷つけるものはないのだから」に、「生まれて御免なさい」のフランス的変奏を味わった。そして神なき極東の島国で、この罪障感が作家を自裁へと導くものだったことは、モーリス・パンゲの『自死の日本史』も教えるところだった。

太宰治と森有正の死を隔つ距離に、相互侵食する日仏文化交渉の認識の厚みが見える。

ノートルダム

思の隅景

1